

## 日本に生母、47年ぶり再会 国際養子縁組で渡米の男性

2015年7月5日13時29分



47年ぶりの再会を果たした母と息子＝ワカイさん提供

米国ハワイ州議会の上院議員グレン・ワカイさん（48）は昨年、日本人の生みの母と47年ぶりの再会を果たした。生まれてすぐに乳児院に預けられ、1歳半でハワイの日系人夫婦のもとに養子縁組され、米国人として育った。自分が養子だと知っていたが、愛情を注いで育ててくれた両親への遠慮もあって追究せず、親しい友人にも語らなかった。ルーツ探しの「旅」に乗り出したのは、両親が相次いで亡くなったのがきっかけだった。

2年前の秋に病死した母の遺品を整理していた父は、一冊のパスポートをワカイさんに手渡した。幼い自分の写真とともに

「島袋満」という日本名が記されていた。間もなく父も逝く。ワカイさんは初めて「生みの母に会いたい」と思った。日に日に思いがおさえられなくなった。

日本人の妻美希さん（43）の助けで、自分の国際養子縁組を仲介した機関を見つけ、その取り次ぎで沖縄に住む生みの母、ボートン洋子さん（64）とつながった。昨秋、洋子さんが米国人の夫と共にハワイを訪れ、再会を果たした。

「なんて自分と似ているんだろう。小柄で人なつこくておしゃべりで」。ワカイさんは洋子さんを海に面したお気に入りのレストランに招待した。「育てられずにごめんなさい」。泣きながら謝る洋子さんに、ワカイさんは「その気持ちだけで十分。産んでくれてありがとう」。母と息子は半世紀近い空白を埋めるように語りあった。

洋子さんは当時、美容師を目指して上京。16歳でワカイさんを産んだ。独りで育てるつもりだったが親族に強く反対され、失意のうちに沖縄に戻った。「どうか満ち足りた人生を送って」と「満」と名付けたという。国内で育て親を見つけるのは困難な時代。ワカイさんが施設を経て海外に縁組されたことを洋子さんは知らなかった。「満のことは片時も忘れず、ちゃんと生活できているのかずっと気がかりだった。ひと目会って謝りたかった」

「すべて起こるべくして起きたとしか思えない」とワカイさんは言う。日本人と結婚し、妻

がルーツ探しを助けてくれたこと。生みの母が国際結婚していて言葉の壁がなかったこと。政治家としてハワイと日本の懸け橋になれる立場にいること――。

ワカイさんはテレビ記者を経て13年間、州議会の上下両院議員を務め、議員団の交流でも日本を訪れる。自分のルーツ探しをきっかけに、親と暮らせない子たちのための社会的養護の政策に関心を持ち、日本ではそうした子たちの多くが施設で暮らしていると知った。米国では毎年、里親制度の下にいる約5万人が養子縁組されるなど家庭での養護が主流だ。生まれた国と育った国との違いに自らの「役割」を感じたという。

「僕は愛情を注いでくれる両親と出会って無限の可能性を与えられた。子どもには1対1で向き合ってくれる大人が必要だ」。ワカイさんは今後、日本の社会的養護の関係者らに自身の経験や家庭養護の意義を伝えていきたいという。(グローブ編集部・後藤絵里)



〈国際養子縁組とルーツ探し〉 国際養子縁組は第2次大戦後、戦災孤児を救うため世界的に活発化した。日本でも日米孤児救済合同委員会を前身とする社会福祉法人・日本国際社会事業団などが、親が育てられない子らを米国を中心に海外の育て親につないできた。事業団は2千人あまりを国内外の外国人家庭に縁組し、記録は全て保管している。90年ごろからルーツ探しの照会がくるようになり、近年は毎年10件程度あるという。職員の田中美結さん(31)は「相手側の心の準備度合いや今の家族への影響もあり、ルーツ探しは時機も含め熟慮が必要」だと話す。

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.